

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 適用のお それ	E 患者背景（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化 につながるおそれ）	G 使用方法（使用のおそれ）	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	慎重投与 （投与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	症状の悪化 につながるおそ それ	使用方法（使用のおそれ）	スイッチ化 等に伴う使 用環境の悪 化		
		併用禁忌（他 剤との併用に より重大な問 題が生ずる おそれ）	薬理・毒性に 基づくもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理・毒性に 基づくもの	症状の悪化 につながるおそ それ	使用量に上 限があるもの	スイッチ化 等に伴う使 用環境の悪 化		
ウフェナマー ト	コメバック錠 膏・クリーム		薬理・毒性に 基づくもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	慎重投与 （投与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	症状の悪化 につながるおそ それ	使用量に上 限があるもの	スイッチ化 等に伴う使 用環境の悪 化	本品の重量を1日数回患 部に塗布または貼布す る。	急性湿疹、慢性 湿疹、接触性 皮膚炎、アト ピー性皮膚炎、 おむつ皮膚炎、 唇舌皮膚炎、 口唇皮膚炎、 帯状疱疹

非ステロイド抗炎症成分

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のおそれ		E 中毒性（既経歴、治療歴等）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（既使用のおそれ）		H スイッチ化に伴う使用法の変化		用法用量	効果効果
	薬理作用	相互作用	併用薬（他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ）	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理・毒性に特異性（アレルギー等）によるもの	薬理・毒性に特異性（アレルギー等）によるもの	薬理・毒性に特異性（アレルギー等）によるもの	慎重投与（妊婦により胎児の異常、悪化のおそれ）	症状の悪化（既往歴、治療歴等）によるもの	用法用量（既使用のおそれ）	使用法（既使用のおそれ）	スイッチ化に伴う使用法の変化	スイッチ化に伴う使用法の変化		
イソプロピルメチルフェノール	本剤は、使用薬性において、グラム陽性菌・グラム陰性菌・結核菌・真菌・ウイルス等に対して、広範囲にわたる抗菌作用を示す。また、ウイルスに対しては、抑制作用を示す。本剤は、使用薬性において、グラム陽性菌・グラム陰性菌・結核菌・真菌・ウイルス等に対して、広範囲にわたる抗菌作用を示す。また、ウイルスに対しては、抑制作用を示す。																効能・効果 用法・用量（本品希釈液） ・手指・皮膚の消毒：フェノールとして1.5～2%溶液を用いる。（50～67倍） ・医療用器具・手術室・病室・浴室・洗面所・物品などの消毒：フェノールとして2～5%溶液を用いる。（20～50倍） ・排泄物の消毒：フェノールとして3～5%溶液を用いる。（20～33倍） ・下痢・嘔吐の鎮静：フェノールとして1～2%溶液を用いる。（50～100倍） ・蚊・蠅の駆除：フェノールとして2～5%溶液を用いる。（20～50倍）	

製薬成分

ワークシートNo.37

かゆみ・虫さされ用薬

鎮痛・鎮痙・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワケシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 最寄警報（急性症、治療法等） （重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化 につながるおそれ）		G 使用方法（飲用のおそれ）	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	効能効果
			重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）			症状の悪化 につながるおそれ	症状の悪化 につながるおそれ			
評価の観点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ	薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ	症状の悪化 につながるおそれ	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法（飲用のおそれ）	スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	効能効果
シフェンヒド ミン	アレルゲンを 遮断または皮 内注射したと きに起こる赤 赤、腫脹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回投与 により著明に 抑制される。	相互作用 併用禁忌（他 剤との併用に より重大な問 題が生ずる おそれ）	重篤な副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	重篤な副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	症状の悪化 につながるおそれ	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法（飲用のおそれ）	スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	効能効果
ロメレイン 酸クロロフェ ニラミン	外用がない のでボラリス ミン2mgを 使用	中樞神経抑制剤・アルコー ル・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤相互に作用 を併発し、ドロキシン（バ ルビタール）（血圧の異常上 昇）	重篤な副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	重篤な副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ （薬理・毒性に 特異的な 副作用のおそれ）	症状の悪化 につながるおそれ	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法（飲用のおそれ）	スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	効能効果

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 適用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(服用のおそれ)	H スイッチ化に伴う使用環境の変化	効能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ)	薬理・毒性に特異性によるもの	薬理・毒性に特異性によるもの	薬理・毒性に特異性によるもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	併用注意	
鎮痛成分	プロタモドン	オピオイド系	本剤は抗コリン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚の抑制作用が、他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ	本剤は抗コリン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚の抑制作用が、他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ	本剤は抗コリン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚の抑制作用が、他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ	本剤は抗コリン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚の抑制作用が、他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ	本剤は抗コリン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚の抑制作用が、他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ	本剤は抗コリン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚の抑制作用が、他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ	鎮痛、鎮痒、収れん、消炎作用
局所成分	アミノ安息香酸エチル、アミノ安息香酸メチル								局所麻酔作用

ワーグシートNo.37

[illegible]

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 既存背景（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化 につながるおそれ）	G 使用方法（誤使用のおそれ）	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	機能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	重症投与 （投与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	症状の悪化 につながるお それ	使用量に上 限があるもの	スイッチ化 等に伴う使 用環境の悪 化		
		併用禁忌（他 剤との併用に より重大な問 題が生ずる おそれ）	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの （頻度不明）	重症投与 （投与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	重症投与 （投与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	使用量に上 限があるもの	スイッチ化 等に伴う使 用環境の悪 化		
リドカイン	キシロカイン 液（4%）：塩 酸リドカイン 表面麻酔に 使用	神経麻酔のナ トリウムチャ ネルをブロッ クし、神経に ける活動電位 の伝導を可 逆的に抑制 し、知覚神経 及び運動神 経を遮断する 局所麻酔薬 である。表 面・浸透、伝 導麻酔効果 は、塩酸プロ カインよりも 強く、作用持 続時間は塩 酸プロカイン よりも長い。	意識障害、 呼吸抑制、 循環不全（ 頻度不明）	ショック（頻 度不明）	高齢者又は全身状 態が不良、心臓病 、肝臓病、腎臓の 機能障害又は腎 臓機能障害。幼児。 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人。	重症投与又は全身状 態が不良、心臓病 、肝臓病、腎臓の 機能障害又は腎 臓機能障害。幼児。 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人。	・過量投与で中 毒症状が現れ る。症状として中 毒や呼吸系（不安、 麻痺、意識消 失、全身痙攣な ど）、心血管系 （血圧低下、徐 脈、循環虚脱な ど）が現れる。 眼科（点眼用 ）として使用しない こと。注射用とし て使用しない。		塩酸リドカインとして、通常 成人では80～200mg（2～ 5mL）を使用する。 なお、年齢、体重、病 位、組織、体質により適量 増減する。 幼児（特に3歳以下）では 低用量から投与を開始。	透疹、皮膚炎、 痒疹、神経皮 膚炎、神経反 応
グリチルレチ ン酸	グリチルレチ ン酸は急性 炎症に対する 抗炎症作用 （環状抑制制 薬、抗炎症 作用）を有 する。抗炎症 作用は主成 分であるグリ チルレチン酸 の化学構造 が、ハイドロ コチゾンの 化学構造に 類似している ところによる と推定され る。			5%以上又は 頻度不明（過 敏症）			誤投与として使 用しない		通常、症状により適量を1 日数回経口または 経静脈に投与または 経静脈に投与する。	

局所麻酔成分

抗炎症成分

局所麻酔成分

抗炎症成分

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 中毒性（薬理作用、治療効果、副作用） （重篤な副作用におそれ）	F 効能・効果（薬理作用、治療効果） （重篤な副作用におそれ）	G 使用方法（薬理作用、治療効果） （重篤な副作用におそれ）	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 効果 （重篤な副作用におそれ）	J 効果 （重篤な副作用におそれ）	K 効果 （重篤な副作用におそれ）
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	薬理作用のおそれ	副作用のおそれ	副作用のおそれ	副作用のおそれ	副作用のおそれ	副作用のおそれ	副作用のおそれ	副作用のおそれ
サリチル酸 メチル「ミヤ ザワ」	サリチル酸 メチル「ミヤ ザワ」	相互作用 （他剤との併用） より重篤な副作用が おそれられる	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの
イブプロフェン メチル「フェ ノール」	イブプロフェン メチル「フェ ノール」	相互作用 （他剤との併用） より重篤な副作用が おそれられる	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの	薬理・毒性に よるもの

抗炎症成分

鎮痛成分

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワケゲントNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 並用のおそれ	E 患者群（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化 につながるおそれ）	G 使用方法（使用のおそれ）	H スイッチ 化に伴う使 用環境の 変化	用法用量	効果効果
評価の観点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	過敏症と （依与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	症状の悪化 につながるおそ れ	使用量に上 限があるもの	スイッチ化 に伴う使 用環境の 変化		
殺菌成分	抗腫作用(in vitro試験) ・広範囲の微生物に作用し、グルタミン酸性物質に低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度での殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には殺菌力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では殺菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くは抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用順序は作用機序は十分に説明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的選出や薬剤阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が生ずるおそれ) 併用注意	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に特異性・アレルギー等によるもの シヨップ(0.1%未満)	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に特異性・アレルギー等によるもの 0.1%未満(過敏症)	・アレルギー性皮膚炎、接触性皮膚炎、喘息、鼻炎、気管支炎、中耳炎、外耳炎、耳痛、耳鳴、耳の腫れ、耳の痒み、耳の痛み、耳の臭い、耳の分泌物、耳の出血、耳の発赤、耳の乾燥、耳の皸裂、耳の潰瘍、耳の腫瘍、耳の癌、耳の感染症、耳の寄生虫感染、耳の真菌感染、耳のウイルス感染、耳の細菌感染、耳の真菌性皮膚炎、耳の細菌性皮膚炎、耳の真菌性鼻炎、耳の細菌性鼻炎、耳の真菌性気管支炎、耳の細菌性気管支炎、耳の真菌性肺炎、耳の細菌性肺炎、耳の真菌性心臓病、耳の細菌性心臓病、耳の真菌性腎臓病、耳の細菌性腎臓病、耳の真菌性肝臓病、耳の細菌性肝臓病、耳の真菌性膵臓病、耳の細菌性膵臓病、耳の真菌性胆道病、耳の細菌性胆道病、耳の真菌性糖尿病、耳の細菌性糖尿病、耳の真菌性高血圧、耳の細菌性高血圧、耳の真菌性動脈硬化、耳の細菌性動脈硬化、耳の真菌性脳血管障害、耳の細菌性脳血管障害、耳の真菌性認知症、耳の細菌性認知症、耳の真菌性うつ病、耳の細菌性うつ病、耳の真菌性統合失調症、耳の細菌性統合失調症、耳の真菌性双極性障害、耳の細菌性双極性障害、耳の真菌性摂食障害、耳の細菌性摂食障害、耳の真菌性睡眠障害、耳の細菌性睡眠障害、耳の真菌性物質使用障害、耳の細菌性物質使用障害、耳の真菌性自傷行為、耳の細菌性自傷行為、耳の真菌性自殺、耳の細菌性自殺、耳の真菌性他害行為、耳の細菌性他害行為、耳の真菌性犯罪、耳の細菌性犯罪、耳の真菌性知的障害、耳の細菌性知的障害、耳の真菌性精神遅滞、耳の細菌性精神遅滞、耳の真菌性発達障害、耳の細菌性発達障害、耳の真菌性学習障害、耳の細菌性学習障害、耳の真菌性注意欠陥多動性障害、耳の細菌性注意欠陥多動性障害、耳の真菌性強迫性障害、耳の細菌性強迫性障害、耳の真菌性恐怖症、耳の細菌性恐怖症、耳の真菌性不安障害、耳の細菌性不安障害、耳の真菌性気分障害、耳の細菌性気分障害、耳の真菌性気分うつ病、耳の細菌性気分うつ病、耳の真菌性気分双極性障害、耳の細菌性気分双極性障害、耳の真菌性気分躁うつ病、耳の細菌性気分躁うつ病、耳の真菌性気分分裂性障害、耳の細菌性気分分裂性障害、耳の真菌性気分統合失調症、耳の細菌性気分統合失調症、耳の真菌性気分双相性障害、耳の細菌性気分双相性障害、耳の真菌性気分周期性うつ病、耳の細菌性気分周期性うつ病、耳の真菌性気分季節性うつ病、耳の細菌性気分季節性うつ病、耳の真菌性気分産後うつ病、耳の細菌性気分産後うつ病、耳の真菌性気分更年期うつ病、耳の細菌性気分更年期うつ病、耳の真菌性気分老年うつ病、耳の細菌性気分老年うつ病、耳の真菌性気分老年痴呆症、耳の細菌性気分老年痴呆症、耳の真菌性気分老年認知症、耳の細菌性気分老年認知症、耳の真菌性気分老年痴呆症					

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 最悪常量(既往歴、治療法等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効果効果
		相互作用	併用注意								
評価の観点	薬理作用	相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法(使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用環境 の変化		
抗白癬薬成分	抗作用 シクロピロク スオキシミン ・ハトラフェ ン液	併用禁忌(他 剤との併用に より重篤な副 作用が生ずる おそれ)		重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 特異的性質・ア レルギー等 に基づくもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に 特異的性質・ア レルギー等 に基づくもの	慎重投与 (投与により副作用 の発生・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法(使用のおそれ) 使用量に上 限があるもの	スイッチ化 等に伴う使用環境 の変化	1日2～3回患部に塗布又 は塗擦する。	・白癬・体部白 癬・皮膚白癬 ・カンジダ症 ・間接性、乳児 寄生性紅 斑、指間皸癬 症